

現地報告

報告1◆安藤 周治 様

(広島県三次市(旧作木村))

・NPO ひろしまね理事長)



皆さんこんにちは。ご紹介いただきました安藤です。「ひろしまね」という言葉だけで多分広島県、島根県、両方又にかけて・・・人にいいますと道州制を先取りした NPO 法人ではないかというようなことも言われて少しいい気になったりをしていますけども、実は島根県知事の認証の NPO 法人です。メンバーは広島県からの参加者が多いという非常に変わった組織でもあろうかと思えますけども、ご紹介いただきましたように今年で6年目になりますが活動をやってきています。

少しパワーポイントを使いながらご紹介していきたいと思えます。私たちの活動というのは逆のぼりますと1986年、江の川という中国地方で一番の大きい川がありますけどその流域を中心にした活動「江の川流域会議」が発足して、それを母体にして2004年に NPO 法人ということになってきました。活動のエリアというのはまさにこの地図を見ていただくように中国地方一の江の川というのがありますけどその流域で地域づくりに関わっているメンバーで構成をしています。松江市からも2時間あまりかかりますけれど参加があります。それから広島市からも参加があつたり、県域から行っても1時間～1 時間半かかるメンバーも参加をしてくれています。で、中国山地というのはこの会津とは少し雰囲気は違いますがこういった中国山地のほぼ頂上に近いような感じで、ここは標高 300～400 ぐらいだと思んですが、こんな石州瓦が非常に印象的です。これは3、4日前ほどに撮った写真なんですけども田んぼの中に少し赤い石州瓦に似た色があると思うのですが蓼の実りの秋を迎えた風景です。屋根の赤と蓼の赤のマッチングが非常にいい、私の好きなスポットの一つでもあります。そしてこれは春の水田の風景ですけど頂上近いところで同じように田んぼが作られたりしています。これは中国地方でいうと、たたら・・・和鉄の生産の歴史がひとつベースになって頂上付近まで人家がありますし、集落で田んぼを作っていくというような事です。

ところが一方こういった厳しい状況があります。かつては民家の屋根が崩れていくというのは普通に過疎地域の風景なんですけども、残念ながらお寺の本堂の屋根が抜けていく風景も見られるようになりました。これは非常に大きな変化だと私達は捉えています。地域の人が浄財を集めあるいは自分の家の山の本を切って寄付しながら自分達で作ったお寺、心のよりどころでもあったお寺が無住になってきた・・・無住にもなるしお寺の管理も出来なくなってきたという状況が見られると思います。その末にこういった12個あった集落が消えていく。残っているのはこういう地域から出て行った他出した人達の思いを寄せながらこういったものを残していつている地域の姿でもあります。

そんな状況が中国山地に広がっていますが現実を見ると非常に数字的にも厳しい数字が出る。これは私が住んでいます広島県三次市作木町の大字単位に集計をとった高齢化率であります。色付けしてあるところがすでに50%を超えて赤い色に見えますと思えますけど、これが60%を超えている集落の所です。8割方こういう高齢化率になっています。そういった数字を見ていくだけでも大変なんですけども実はここで1つ落とし穴のようなものがあるかと思えます。統計水準の取り方です。できるだけ細かい大字単位ぐらいまでに落として数字をとってもらいたいというのが我々の願いです。今市町村合併をやりまして私たちの所も、三次市で平均値を出すと高齢化率も30%少しというようなことになって、はたして地域はどうかという実態

がつかみにくくなっているのではないかと・・・そういう意味では大字単位くらいでは統計をとるようにして欲しいなという願いがあります。

そういった高齢化の進む中で、集落維持が難しいということで10年ほど前からもう1つの役場ということで、地域の様々な活動を集約的にする拠点あるいは新しい仕組みづくりがいるのではないかと。町内会、自治会だけでは少し荷が重くなってきた。大字単位あるいは小学校単位ぐらいで役場がやってきた仕事、あるいは集落でやらなければいけない仕事を請負いながらもやっていくような、新しい仕組み作りというのがこれからいるのではなかろうかということで、もう1つの役場という提案を始めました。そして大字単位ぐらいで役場に代わるようなことということでずいぶん議論をしてみました。そういう役場の役目というのはこういう曼荼羅絵にしてみますと九つぐらいに仕分けができるのではないかなと・・・これは当然地域の実状あるいは課題を整理しながら私達で項目を挙げていったものなんですけど皆さん方のお手元の資料の中にも掲載していますので最後は見いただければと思います。

こういったものを少し整理して、もう1つ役場の実像というものはどういうものがあるのだろうかとのことで整理をしてみました。そして既存の地縁型組織、町内会自治会等先ほどからお話していますもう1つの役場のNPO組織との関係図というのもこういう関係であればきっと地域の中でうまくいくのではないかと・・・

もう1つの役場というものをもう少し分かりやすくというと、ここの集落支援センターという名称で皆さん方に話をしながら実際にこういうものをつくってみては？ということで取り組みを始めて来たわけです。その提案を持ちながら実際にはもっと地域に入って行かないと実際のことをつかむことができないのではないかと、ということでまさにこの目線を同じくしながら座り込んでお年よりの話を聞いて集落を回ってあるいはこの図の中から地図を広げて林地の状況を把握したりしています。

これから多分、田あるいは畑の場合は問題ないでしょうけど林地が定かでなくなると地積調査はされても現地との照合ということになると問題を抱えてくるのでは？ということも浮き彫りになってまいりました。ずいぶん悉皆調査というものを繰り返しながら各地で展開をしています。調査を中心にしてニーズ・・・青い部分が聞き取りをした時にこういう問題点を抱えているというのができます。これは調査をした時は12月でしたからもう除雪の問題が一番大きいということでもあります。そして出入りする交通の便ということで送迎の問題というのが非常に支援もして欲しい所を感じている・・・そんなところです。こういう形でヒアリング調査・・・悉皆調査をやってつまびらかになってくる。こういうものがないと多分、集落対策あるいは細かな対策を考えて行くという中でもなかなか現実味を帯びてこないのではないかなという気がいたします。そして一番地域の中で大変だというような1つに、村での役目役割ということがよく言われるのでどういう役割があるのかということ、行政関係が一番多い。市役所や役場が地域の町内会、自治会を一番福祉しているのではないかとという気がする。こんなものが非常に負担になっているという話を聞きます。そしてもう一つお年寄りの生きがいでもある、家庭菜園の被害というのが、イノシシやサルに被害を受けるということでこういう実験をしました。

そして先ほどお話していますけれど、農地や林地、これは農地ですけども現在とそれから10年後、これは島根県の・・・先ほどの石橋町長さんの地域での実態調査なんですけども、こういう変化が出てくるのではないかなと、10年先にもう耕作放棄になるというのもだんだん数を増してくるということも年齢構成を見ると予測ができますけれどそんな感じがいたします。そして放棄された田んぼや畑の管理をどうするかということで、ここは下地づくりをしていますけれどこういった牛の放牧で作業ができるのではないかと。実際に借りてきた牛が非常にきれいに草刈りをしてくれたという実験等も昨年終わっています。そしてそういう実験を繰り返し広げて行く中で新しくこういった集落支援センターという組織を作る必要があるだろうということで、

これは長の持ち物の施設になっているところをお借りしてこの2月にこういった拠点づくりということで作業を始めたところです。私たちがやり始めたのと同様に広島県側、島根県側で同じような集落支援を目指す法人組織が立ち上がってきました。

ひとつはLLPといわれる有限責任事業組合という形で同じような仕事をやっています。あるいは、わかたの村という株式会社でそういった活動をやろう、あるいは農事組合法人を作ってそこで地域の生活支援をするというようなことを考えてみようという動きを始めました。そして先だって今月の初めですけどもその4団体の皆さん方を囲んでの勉強会というのを、5年くらいはしっかり継続して開こうではないかということで1回目90人近くの皆さん方にお集まりいただいて勉強会を始めたところです。そしてこれはそのときも発表してもらったんですけど、先ほど言いましたもう1つの役場、集落支援センターの財政的な基盤、どのくらいお金がかかってどのくらいその収益の可能性があるのかというのを概算見積りいたしました。これもお手元の資料の中にあるので見ていただきたいと思いますけれども地域を守っていくのにどうしてもこういう中間支援型の集落支援センターが必要だということで、例えば、センター長24万計上していますけれども、まありタイヤの方でも大丈夫だと思いますけれども。地域マネージャーというのはやはり実際に動くので少なくとも役場の係長さんやそれより上くらいの収入がないとまずだろうということで、こういった32万という計上をしています。そのほかもろもろの経費を入れていきますとやはり結構お金がかかります。ざっと1,300万かかるんですけどその収入の道というのは非常に厳しい状態です。

このグラフを見ていただくとお分かりのように入ってくる可能性があるものは会議収入だったんです。あるいは事業収入で先ほど報告していますけれどもこれで牛の生産が可能かどうかというののもちょっと疑問にはなりますがそういった事業収入をして自ら稼ぐということもあろうかと思います。そしてもう一つこれから可能性が考えられるとしたらグリーンツーリズム・体験型のツアーを企画して収入を得る。そしてふるさと米というのも特別米の販売を考えてみようではないかということで今「ひろしまね」では企画をしている段階です。そして事務代行・・・これはいくらいい制度ができてそれを処理していく、あるいはそれに対応した事務局体制、仕事をしていくのが集落ではできないと、直接支払制度ももうあんなに難しくなったら我々では手をあげることがなかなかできなくなったという地域がだんだん増えてきていますけれども、その事務代行で収入を得る、というような話もしています。そしてこれはパーセンテージとして1番大きいのですが今までどおりのように行政からの調査物、あるいは受託事業で資金を稼いでそれを地域の皆さん方のために使っていくという形でしか今のところ採算というかそろばん勘定というのが合わないのではないかという非常に厳しい思いをもつてもう1つの役場を考えています。財政基盤というのはやはり行政からの補助金ということではないんですけども、事業をまわしていくということでしか基礎的な財源を確保することにはならないのではないかなという話をしています。これから地域で頑張っていこうというのは、国の政策の中にもいろいろ出てきました。非常に期待をしているのは例えば農商工連携とも、これから幅広く出てくると思いますけれどもこれまでも願ってきた商工会、農協、あるいは農家の人と商工会あたりがどれだけ新しいプロジェクトを展開できるかということになるかと思います。そういう新しい制度が地域へ感心を持ち始めた今の時代ではないかという気もしています。

そして今、行政の中での地方分権が進んでいるわけですけど、もう一歩進んで地域への分権、さきほど財源の話をしましたけど地域のうけ皿に対しての分権をどこまで進めていくのか、これは権限とあるいは財源の部分も含めて分権ということも是非とも検討していただきたいなという気がいたします。

そしてもう1つ先ほどお寺の写真を見ていただきましたけども資源がいっぱいありながら地域の財源が非

常に厳しい状況にあります。たとえば農地もそうです。農業委員さんがチェックはずいぶんされてきましたけどその農業委員さんも人数そのものが少ないということで監視の目・チェックの目が行き届かなくなっているというのも現状ではないかと思います。そういったことも含めて地域の資源を一括管理するような新しいシステムというのが必要ではないかということでふるさと信託機構・・・地域の中には空家もあります。それを行政でなくて民間のこういった新しい仕組みの中で管理運営できないかということです。そして事業の中味からすると非常に個別対応の時代に来ている。

そして自己決定、自己責任まではいきますけどもう1つは自己実現という所でこれは非常にソフトな部分になるかもしれません。そういった部分が地域活動の中であるいは集落を支援していく中で、一人一人が生き生きしてくるというのは多分こういう自己実現ができるようなソフトの視点というのがいるのではないかなという気がいたします。

そしてもう1つ、協働がよく言われたりあるいは企業も言われますけども、現実的に地域で若い人が欲しいということであれば、1つとしては大学との連携あるいは知識情報との連携といってもいいかわかりませんが、そこに対する期待は非常に大きいと私もは思っております。そしてこれまでの地域での活動を考えていきますと、1つはやはり縦割りではなくて相互的な地域での対応、あるいは行政の対応もそうですけど、地域で活動する中で相互的なものが1ついると・・・そして何か1つその1点、突破するような活動の中で全体が動いていくということになる、そういう一面突破というようなきっかけが小さな集落でもいるのではないかなという気がします。地域に資源があります。それを磨き上げる方法、あるいはそれを商品化もしていく というような流れが1ついるのではないかな、と思います。ものを作ってもあるいはサービスを提供するにしてもロットが小さいわけです。ロットが小さいからひとつのことだけをやるのに人が動くのではなくて2つ3つ合わせて人が動くような合わせ技で物事を簡潔させるような、そういう発想がいるのではないかなと思う。そして誰がやるかというのがいつも問題になります。これはきっとおじいちゃんおばあちゃん含めみんなが主体で動いていく、それもちよっとずつ力を出していく発想がいるのではないかなという気がします。

もう1つの役場あるいは集落支援センターというような名称でお話しましたが、行政でもないあるいはまったく民間ではあるが法人格をもった中間的な組織の出番が中山間地域にどうしても必要なんじゃないかなという気がいたします。

そして先ほどもお話ありましたが集落支援員制度というのが動き始めて非常に期待してるわけですけど、地域を歩いていくともう補助金はいいと。手続きも大変なので、補助金はいいから私達を助けてくれる補助人制度が欲しいというような話が出てきました。それがようやく実現するということで非常に期待をもっています。

地域の中に出かけていくと、じいちゃんばあちゃん様々な意見を出してきます。たとえば皆さん方どうお感じになるかわかりませんが、お年寄りが一番無駄だと思っていることはなんだろうか。お聞きするとびっくりすることにお風呂が一番無駄だと思う、という話・・・一人暮らしのじいちゃんばあちゃんがお風呂沸かして一人しか入らないのにガス、燃料を使ってお風呂をためる。4、5人入っても差はないがそれが非常にもったいないという思いがする。我々が思ってもみなかった課題、問題意識が随分出てくるように思う。

こういう活動を通じながらこれまでやってきています。これから中山間地域をやるのにここの集落で対応というよりもそういう中間支援組織の出番が今きているのではないかな、ということで話を終わらせていただきます。また細かい話はのちほどのパネルディスカッションで事例とともに話していきたいと思います。ありがとうございました。

報告2◆青砥 昭修 様

(喜多方市熱塩加納町黒岩行政區長)



今ご紹介いただきました青砥です。本来絵を描いている者ですからこういう所でしゃべれというのはきわめて私にとっては困難なものでお聞き苦しい点があるかと思いますがお許しください。先ほどの安藤さんはパソコンを使っているいろいろな資料を提供されたようですが、過疎地・・・私の住むようなところはインターネットが通じない、パソコンが使えない、携帯電話が通じない、テレビがよく映らない、何年か先の地デジが映らない、そういう現状なんです。

そういう所を踏まえて現状報告ということでしゃべれということで、昨日一晩かかっていろいろな資料をまとめたのですが、先ほど楽屋のほうでコメンテーターの遠藤さんと話したんですが過疎限界集落あるいは水源の里といいましても、全国の過疎にはいろいろな違いがありまして、たとえばインフラ整備が比較的整っている近くの過疎地域、それから私が住むようなインフラ整備がなかなかされてないような奥まった過疎地域、それぞれが抱えている問題は違うと思うんですが私の方ではいわゆる本当に不便な山間地、積雪冬3m近い所、そういった所からの報告ということで多少皆さんの所と現状が違うかもしれませんが想像してお聞きください。

まず何といっても不法投棄、これが本当に悩まされる問題なんですね。トラックに産業廃棄物を積んできては山奥に捨てる。秋に捨てられると分からない。翌春になってみてこんなに捨てられていたのかという現状、こういったものが頻繁です。私たちの集落では6人が暮らしておりますが、私の工房で比較的体が動く・・・動くというと高齢の方に失礼だが残りの方は高齢化率でいくと100%になってしまうような高齢の方です。こういう方とごみを収集しろと言われても極めて困難である。おそらく全国の過疎地域に同じような問題を抱えている所があるかと思いますが非常にこう、住んでいる側としては単なる不法投棄ということでなくて住んでいる環境が非常に見苦しくなっていく、そういうことにいつも悩まされております。

当然人がいないわけですからごみを捨てる。人がいないことによってまた別の問題も出ます。それは植物の盗掘です。今山野草ブームですからちょっと山間地に入ってくると珍しい植物がたくさんある。私のところでは皆さんご存知ないかもしれませんが、クルマユリというのが自生している。これは標高でいうと1000m近い所の山にあるユリの一種なんです、これが一箇所自生している所があるのですが今ほとんどなくなりました。それから奥山に入るとエビネ、これも山野草愛好家にとっては非常に欲しいものの1つでしょうけどほぼ絶滅している、それから昔は田んぼのあぜ等にたくさんあったおきなぐさ、これは1本もありません。

植物の盗掘と同じように動物の密猟、もしかしたら天然保護獣ですから捕獲は禁止ですけども何年か前に・・・だいたいどのような地区から来ているか分かるのですが、スノーモービルで冬にきて奥山に入って密漁していく。そのまま持ってくると罰せられるので現地で毛皮を剥いで肉だけ持ってくる、春になり私たちが山菜取りに行ったらそれを見つける、そういう現実もあります。

そういう風な現地からのなかなか平地では分からない、しかも分かったとしても役所一部の所にしか報告されない現状というのはたくさんありまして、もちろん周囲の環境だけでなく私たちの所に来る生活道・・・明日現地視察でこの中の何人かおみえになると思いますが25人乗りのマイクロバスで来られるという事ですけれど、やっと通れるような道です。ガードレールがほとんどありません。落ちたら60m下の谷に落ちる。明日落ちないで到着されることをお待ちしております。

そういう所に住んでいますとなお積雪が冬3m近い道路わきが片側斜面ですから、大木が雪の重さで倒

れる、道路をふさぐ、通行不能になる、というような事が毎年です。それから落石、春になって雪解けの頃になると地盤がゆるくなりますから・・・春先にはスコップを積んでいるのは当たり前です。皆さんスコップを積んで地元の方は移動しておりますけれども当然あたれば死にます。大きな石も落ちてきますからそれは毎年のことですね。

それから9月の1日全国一斉の防災訓練というのがあったと思うんですが、私たちの所はあまりうれしくないことですが、孤立集落からの救助ということで自衛隊機と県警ヘリとレスキューヘリとで運ばれる訓練をしたんです。ヘリコプターに乗れたのは嬉しかったんですが・・・その2日前、30日にもものすごい大雨だったんですね。実際に土砂が流出しまして不通になって孤立していたわけです。復旧したのが31日、翌日が防災訓練でヘリコプターでつりだされると。2日前に防災訓練だったら実際の孤立から救出となったわけですが、そういった道路不通になるということも毎年のことなんですね。一向にその公共事業というのは進んでおらないのが現実です。

それに加えて今日はいまこの場に喜多方市長もおられるということでなかなか申し上げにくいんですが、合併が行われました数年前に。この合併によって、はっきり申せば少数切り捨てということでサービスの低下ということが顕著であります。具体的に申し上げますと除雪体制の低下、そういったものも現実問題として山間集落に住んでいるとなかなか切実な問題になっております。当然雪崩の問題、そういった事も頻繁に起きるわけです。

それから総務省の方、先ほどいらっしゃいましたけども平成20年から地上デジタルを一斉に総務省の方針でやるという事なんです、私たちの集落ではそうなった時に地デジに切り替えられないだろう、見られないだろうという現実には直面しております。というのはまあ山間集落ですからアンテナ一軒に立てても電波が入らないわけです。ですから向かい山のある程度高い所に集合アンテナを立てて電線で各家に分配するんですが、その地デジの切り替えにあたって平地にいとまあテレビで対応しないならブースターつけるなりさほど費用はかからない。ところが私達集落というのはその集合アンテナの受信点をまず測定してダメであれば移動しなければならない。さらにそれを設置するにあたって、個々人ではなくテレビ組合というのを組織しておりますが、先ほど申し上げたように人口6人、テレビ組合の人数もおのずと知れております。そこで費用負担せよと。この前見積りしていただいたら組合負担が約70万、これを6人で、しかも半数が年金暮らしの方々。その人たちだけで負担せよと言われても実際のところ困難です。となると地デジに切り替えになった時点で私たちの所はテレビ受信が困難であるというような現実を抱えており、県なんかにもそういった対応なんとかならないのか、今だに回答もらえてないのが実状です。

おそらく日本全国みれば私達と同じような環境の集落はあると思うんですが、なかなかこのシンポジウムを通していろんな所で会議を重ねても、現地に行ってみないと分からない現実はたくさんあって、そういったことが、私達今直面しているところです。今申し上げたのが集落を取り囲む外的な問題点なんですね。一方で集落が抱えている内部の問題というのも過疎の原因としていくつかあるんですが、当然山地、あるいは農産地というのは共同作業がたくさんありまして地元では人足などと呼んでおりますけれどもその人足に関わる人口は減少するということは集落の維持管理に対して非常に困難をきたすということ、これが今内部で抱えている問題ですね。

草刈りの問題にしても先ほどのテレビアンテナの補修にしてもそうですけどもそういったものがなかなか思うようにいかない。集落から去っていった方々、その家は放置すれば雪の重さで倒壊する。その放置住居といったものも非常に景観上見苦しい。そのまま放置されっぱなしになっている。そういったことも問題として

抱えております。それから集落維持ではアンテナのみならず神社ですね。山間信仰というのがあって、いろんな神様いますけどそういったものの維持管理がなかなかできないと。それから街路灯集落は喜多方市では集落で管理せよと。その費用捻出もなかなか困難である。それから山の管理、こういったものも難しい。それから自立していくための収入確保、非常に困難である。それから当然そうなってくるとやる気がうせて来る。そういったことを問題点として抱えておりますが、今年度より、県の補助、それから国の農林水産省の補助を受けまして再生事業に取り組んでいる所です。それはなかなか遅々として進みませんでした。

こういったことはのちほどのパネルトークで少し申し上げたいと思います。以上が現地からの報告ということで明日落ちないで来られれば現状を見られると思います。

どうもありがとうございました。

報告3◆平尾 道雄 様 (滋賀県米原市長)



皆さんこんにちは。滋賀県は米原市からやってまいりました市長の平尾道雄です。どうぞよろしくお願いいたします。昨日喜多方へよせてもらいました。私は福島県という会津という名前を一番に思い出したんですが、喜多方へきて会津という冠は関係なくて、喜多方はラーメンもあるし蔵もあるしお酒もあるしということで、確かに全国区の名前をもった町だなあと大変感心をさせられました。そして街中少し歩かせてもらいましたけれども、ほまれというお酒の看板が非常に面白いなと思いました。けれども街角を歩いてみた時に適当かわかりませんけどレトロな感じとか懐かしい思いを何度もさせてもらいました。この懐かしいという言い方は、どうやら私流にいうと居心地がいいとか、ここに帰ってきたい、そんな気持ちを懐かしいという気持ちにさせているのではないかな。こういう心地よい街角、街並みがあるまち、大変素敵だと思いますし、ここでこそ本当の感情をもって育つということはものすごく大事なことだなというふうに改めて思いました。そして縞柿の間をみせてくれる蔵のお店がありました。そこでは女性のご主人から大変丁寧な説明をしてもらいました。本当に暖かく人が人を迎える。そしてそこに蓄積されている富とか豊かさをさりげなく自信をもって紹介される、大変すばらしいまちだと思います。

いずれにしてもこの喜多方を初めて訪れて本日のシンポジウムが関係者のご尽力によってこの盛大に開催されますこと、とりわけ白井英男喜多方市長さんをはじめ、関係者の皆さんが大変ご尽力されたこのこと、感謝の御礼を申し上げたいと思います。誠にありがとうございます。

現地報告ということでございますが時間もだいぶ押しているため、早口で説明いたしますのでよろしくお願いいたします。まず米原市の取り組みということですが、ご案内の通り米原市は近畿地方であります・・・と言いつつも実は岐阜県、三重県に接しているいわゆる滋賀県の中でも一番北東よりのまちであります。古くからご案内の通り、中山道とかあるいは北方街道が通過をしている、そういうまちであります。

具体的には京都と名古屋の間であるということで言葉も名古屋地方の言葉があったり、関西地方の言葉があったりそういう町でもあるわけです。特に北陸地方とも接しているという点では近畿、中部、そして北陸という3地域の交差するある意味では多様性を持った地域であるわけです。当然北部でありますから雪も降ります。豊かな琵琶湖に注ぐまさに水源の里という風に私達は思っています。この米原市、実は平成17年の2月そして同じ年の10月、2回の合併を繰り返すことで誕生した滋賀県で一番小さな市であります。伊

吹山という1377mという日本百名山の1つに数えられている山が一番北部にあります。そして近畿1400万人の命を育みます、大切な水源である琵琶湖まで天の川という川、姉川という川が2つあります。まさに山の天辺から水源琵琶湖まで連なったまちであります。面積は 250.46km²、人口は現在42000人弱という風なところがございます。市内にはご覧のように恵まれた自然環境が整って様々な見所、名勝がございます。是非おいでいただきたいと思います。

さてみなさん何度もお聞きになっていることですが日本の社会、従来高齢化だ少子化だと言っていますけれどもその真正面、正念場の中にいます。日本の人口減少時代の突入の状況そして少子化と高齢化は私たちの町、米原市においても同じ事であります。皆さん方も感じておられる皮膚感覚というんでしょうか、小学生の集団登校の列は確実に短くなっています。地域によってはこの集団登校の列は見えなくなった、という地域もあります。平日のスーパーやあるいは診療所、ここの集いの場にはほとんどお年寄りの姿が目立ちません。そういう状況が今、私たちの皮膚感覚としての街角の状況になっています。高齢者のいわゆる独居、あるいは2人世帯、この事も確実に増えています。要介護者の現状からいいますと、老々介護という言葉と同じに、病々介護、病人が病人を介護するといった実態さえ不思議でも何でもなくなってしまうという地域実状を私達は抱えています。合わせましていわゆる対照的に地域の消防団、自治会の役員、これらも本当に担い手不足が具体的で現実的で深刻な事態になっています。さらには今日お集まりの皆さんの自治体地域現場では、当然のこととなっているかもしれませんが農林漁業者の不足、農地山林の荒廃、このことが確実にこれを進めています。集落の中には、空き家は確実に目立ち始めていますし、それぞれ数百年と続いておりました伝統的な祭り、ここにも村人の感性、歓喜の声は消え始めています。

いわゆる国土、地域のまさに心のよりどころであった学校さえも維持、存続の危機に直面している。何度も何度も学校が統廃合され再び三度、という事態に今追い込まれているのが私たちのまわりの少子化と高齢化の地域実状であろうと思います。こうした農山村地域におけるまさに人口や世帯主の人口は様々な所で議論をされておりますけれども、私は単に日本経済の高度成長やグローバル化した経済規模の拡大、あるいは産業優先、このことも人口流出や農林業の衰退ということの背景にあることも事実でありますけれども、むしろそれは考え方としては大きいのか小さいか、あるいは近いのか遠いかもつとといえば儲かるか儲からないかという風な、安いのか高いかそういう価値観でものを見てきた私自身を含めてですが、私たちの周りの先輩、実は小さくても遠くても見るべきものはあるし価値はある。あるいは儲からんけども少々高いけれどもこっちのほうが安心で安全ですよということにもう一度戻っていく、このことを評価する。このことをあまりに軽く簡単に切り捨ててきた時代が私はこの人口減少あるいはこの水源の里、限界集落の背景にはあるという風に思っています。

限界集落とか消滅集落という言葉を使うことで地域現場において、特にその地域で暮らす人によってこの言葉が元気やあるいはやる気「がんばろう」という気持ちを生んでいるかどうか。実は反対なんだということです。地域の価値にプラスイメージを与えているということには決してなっていません。このことも問題を考える上で是非心しておきたいという風に思っています。具体的な数字の話に入りますけれど、実は高齢化率の問題です。

平成17年の国勢調査で米原市の高齢化率は 23.3%という数字が出ました。それで行政、私もそうですがこの数字を当初どう見ていたかというのを言えば、実は他の市町村と比べてまあまあかなという程度でした。残念ながら最初はそうでした。しかし現場、現地を見た時に65歳以上の人口が50%を超えている限界集落が2集落あります。平均 23.3%と言っているけども限界集落にまさに当てはまる所は2集落、そして

実は55歳以上の人口が 50%を超えている集落が9集落ありました。実はこの9集落、単純に言えば 10 年経ったらすべて65歳以上が半分以上になるいわゆる限界集落の条件になってしまうということが現実としてあるということです。23.3%・・・まあそんなところかな・・・ではなくて現実には 65 歳以上が半分超えている集落があり 10 年経ったらその数が 10 を超え始めるというのが米原市の実態であったわけです。そういう意味から言いましてもとりわけ伊吹山の北部にはこういった地域が点在していたわけです。

地域の小規模化、集落の小規模化、ということと同時に高齢化が深刻な問題として進んでいたというのが実態であったわけです。今日は私達滋賀県からいいますと余呉町の町長さんや議会議員さんも参加をしておられて聞いたんですが、余呉町と私達米原市伊吹北部はいわゆる滋賀県下でも有数の豪雪地帯であるわけです。そういった意味では地域における最近のこの金融不安の中で、実態経済という言葉がときどき出てきますけど、照らし合わせた時に本当の地域実態、ここで大変な危機感が生まれていると思っている。経済や金融の不安と同時に私たちの集落やこの地域、具体的に言うとお墓やお仏壇や屋敷や田畑、誰がどう維持していくんだらうという危機感も含めて何か活路を見つけなければいけないという思いもあって私は今日たくさんの余呉町の議会の議員や余呉町の皆さん、私のまちの本当に共有しているといっている地域実態についても、実は中山間地域の農村集落、そのことだけが問題を共有しているのではない。ここだけの問題回避ではないという風な事態にもなっていると思っています。地球規模での環境問題の深刻化ということも一方で言われていますし、ここにおける森林が持っている二酸化炭素の吸収機能や食料自給率、食に対する安全、安心の観点からも地産地消に議論がされています。何かそのことと地域実態と分けて考えているわけではないですけど、私達はなかなか 1 つに考えにくいような状況に立ってしまっています。

市の面積 70%は実は森林であります。伊吹山とか霊仙山とかいうような山系から実は琵琶湖に水が注いでいる、そういう意味での水源の里という言い方もありますけども、この山、山麓にくらす集落が崩壊を始めて規模が小さくなり始めているということは、実は滋賀県にとっても地域の水がめと言われている琵琶湖にとっても大きな課題が今出ている。今から 30 年 40 年前にそのことに気づかずにむしろふるさととは遠くから見たい、ここで暮らすよりもぎやかな東京、都会に出ることがいいよ、息子や娘達にアドバイスをした親の姿をもう一度振り返った時に、今何をどんな価値を見つけないといけないか、そんな思いでいますと価値観、変革へのアクションを私達は実は積極的に起こしていかなければならないのではないかな、そんな思いです。

今世紀に入ってご案内の通り、地方分権の大きな流れが出てまいっています。基礎自治体であります市町村への権限委譲地域の自主率、あるいは市民共同という言葉は生まれていますけどもまだまだ本物を私達は手に入れていません。そういう中での単に期待に終わらせることなくこの水源の里の課題からも、私は地方分権、地方自治という事を本気になって私たちの手元に置く、そのことが大事だろうと思っています。

四方市長もおっしゃっていましたように私たちの今この流れは時を得ている、そういう思いで言えばうまくやれば追い風に乘れるという意味を含めて、農山村地域の価値とか水源の里の価値を見直してもらおう、ということは今しかないのではないかな、しかもどうやら今しかないという点では時間も限られている、そんな思いでの危機感を持っています。この水源の里が持っています機能とか役割をもう一度考え直すことは市民はもとより都会都市に住む人々にとっても、農山村地域における価値観を呼び起こしてもらおう地域の活性化や、保全に結びつける知恵や想像力をさらにたくましくしていく、重要でかつ意義のある取組みであろうという風に思っております。

私はこうした思いから「全国水源の里連絡協議会」の会長であります四方市長さんの綾部市での取り組みをお手本とさせていただきたいと思いました。米原市において水源の里に関する条例の制定に向けた取り組みを本年改修いたしました。今年の6月でした。市民の皆様をはじめ中山間地域の研究者、そしてマスコミ関係者市内外からの公募委員も含めまして、14名の皆さんによりまして米原市の水源の里に関する条例検討委員会を立ち上げていただきました。骨子の作成の諮問をしたわけであります。

この委員会では全国水源の里連絡協議会の活動理念をまさに検討の重要な柱とさせていただきました。様々な地域で現地調査、市民フォーラムを開催するなど月に2回という非常にタイトなスケジュールで条例骨子の取りまとめの調査検討を行っていただきました。7月27日には四方市長にわざわざ米原市に来ていただきまして市民フォーラムを開催させていただきました。実は先週の金曜日24日の日にお陰様でこの条例の骨子の関係の最終のまとめが行われてまもなく答申をいただける状況の報告をもらいました。本日はこの報告の中でその論議の中身を少しみなさんに紹介をさせていただいて議論につなげればと思いますので少し紹介をさせていただきます。条例骨子策定のポイントには5つありました。

1つは市内全域が水源の里と呼べる地域性を備えていること。2つ目に人口減少、高齢化は刻々と進行し時間の猶予がない問題であること、3つ目に人口減少と高齢化が特に進んだ地域には支援が必要であるということ。4つ目に地域間の交流の促進や空き家の活用、移住、受け入れの仕組みが必要であること、集落の枠組みを越えた新たな自治の取り組みもすでに始まっているという5つのポイントとして整備がされておりました。2つ目には条例全文の案ということでご覧のように提案をもらいました。ここでは上流、下流の関係をもとに水、空気の循環、さらには心の循環、力が循環する関係づくりを市民が一丸となって進め、自然循環共同体の形成を目指すという使命、ミッションを示していただきました。3つめは水源の里の定義については実は米原市全域の集落を水源の里とする整理になりました。4つめは基本理念であります。ここでは3つの使命についての整理を行ってもらいました。自らが水源の里に暮らすものであることの誇りと責任において訴えなければならないとした哲学、世の光を当てるという表現で市民の使命を掲げていただきました。最後に持続的な展開ということで次の世代のために私たちが取組まなければならないこととして3つの整理がご覧のようになされておりました。

非常に駆け足で私が特徴的だと思っているのだけを今紹介いたしましたので不十分な整理になりました。今後米原市といたしましてはこの検討委員会からいただきました報告、答申をもとに条例づくりを進めて参りたいと思いますが、水源の里米原の元気そして未来のためにこうした理念を掲げながら、行政、市民といった関係だけでなく都会、都市に住む皆さん、あるいはNPOなど様々な市民活動団体、事業者の皆さんと事を共有し協議協働することによって地域の活性化の取り組みが今必要ではないか、そのように思っています。

またそうした取り組みを進めることでこの条例の意義が始めて生きてくる、そんな思いであります。地域を尊重するあるいは市民が課題を共有する、さらには多様性を認め合う、そういったまさに合併した新・米原市であるからこそその理念作り、ぜひとも完成させたいと思っています。

結びにこの全国水源の里連絡協議会での活動を縁とさせていただいて、本日会場にお集まりいただきました皆さんとのさらなる連携、そして連帯を深めますとともに当シンポジウムの開催を支えていただきました喜多方市の皆さん方のご発展を心から祈念を申し上げ、以上米原市からの現地報告とさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。